

二つのシャリに一つのネタの話

伊藤パストガバナーの「それぞれの職業奉仕物語」の話をお聞きし思い出したことがある。

私は月初めに一度、決まって職場近くのはま寿司へ寿司を食べに行く。「今月も仕事を頑張るぞ！」という意気込みと、ほぼ毎月の習慣になっていて、その頃になると、ぼんやり「寿司が食べたいなあ・・・」という気分になるからである。

その日は赤身を食べたい気分だったので、席に着くなり最初にまぐろを二皿注文した。タブレットからメニューを眺めながらしばらく待つと、注文したまぐろが到着するアナウンスが表示された。

しかし、期待していたものとは違った状態で届けられた。

自分の席のレーンに届けられた二皿のまぐろの内、一皿にはシャリは二つあるのにネタが一つしか載っていない、なんとも残念な状態で届けられたのだ。

すぐにタブレットから店員を呼び出し、なるべく緊張感を与えないよう、穏やかにこう伝えた。「すみません、さっき注文したまぐろが一皿、一切れしか載っていませんでした。ちょっとご対応願えますか」。店員は侘びながらバックヤードへ一皿を持って行った。

私は他に寿司を頼み、残ったもう一皿のまぐろを食べながら余計なことを考えた。「店員からはどう思われたんだろう。ウソをついてネタを食べた後に呼び出した客などと思われていないだろうか。だとしたら、だいぶあさましく見えてしまうなあ。呼び出さない方がよかったかな」、などとぼんやり不安を募らせていた。

しばらくしてバックヤードから戻ってきたのは先ほどとは別の、責任者と思われる店員だった。椅子に座った私に視線を合わせ、「お客様、この度は大変申し訳ありませんでした。調理した者にはしっかり指導しておきました。調理し直しましたのでこちらをどうぞ」とまぐろを「二皿」用意してくれた。

この時、直前にまぐろを二皿注文していたこともあって、店員が間違えて持ってきたのだろうかと考えが巡り、一皿は辞退してしまった。伊藤パストガバナーのフライドチキンの話を聞いて、「あれは店側の誠意というやつだったのでは」と今更ながら気づいた。店員が誠意であえて二皿を持ってきてくれたのだとすれば、そのお気持ちに思い至らず、そのうちの一皿を辞退し持ち帰えらせてしまったことに、なんだか申し訳ない気持ちになった。

交換してもらったまぐろは、随分とキレイに作ってもらっていたのを覚えている。私としては元々運ばれてきた寿司に足りなかったまぐろを一切れ載せてもらうだけでも全く十分だったのだが、丁寧に作り直したことが一目見て伝わった。

誠意で用意してくれたプラス一皿にあの時気付いたら、さらに満足できていたんだろうなあ、と今更ながら思うとともに、誠意の伝え方、受け取り方は、意外に難しいもんだなあ、と思った。